

## ゴム輪てん絡による乳牛蹄冠部壊死の1例

誌名	日本獣医師会雑誌 = Journal of the Japan Veterinary Medical Association
ISSN	04466454
著者	後藤, 正博 阿部, 勝 五十嵐, 幸男
巻/号	24巻3号
掲載ページ	p. 120-121
発行年月	1971年3月

English summary. 22) PROKUPK, K.: *The penicillin pearl test in the differential diagnosis of Bacillus anthracis and B. cereus*. *Vet. Med. (Praha)*, 14, 102~113 (1969). [English summary] 23) SEIDEL, G.: *Die aeroben Sporenbildner unter besonderer Berücksichtigung des Milzbrand bacillus*. *Beiträge zur Hygiene und Epidemiologie herausgegeben von H. HABAS u. J. KATHE*. Heft 17, 55~103, JOHANN AMBROSIIUS BARTH Leipzig (1962). 24) SHLYAKHLV, E.N. & JOUBERT, L.: *Diagnostic bacteriologique rapide et diagnostique allergologique précoce et retrospectif du charbon bactériéden*. *Bull. Acad. Vét.* 43, 99~113 (1970). 25) SPEARS, H.N. & DAVIDSON, J.C.: *Anthrax*. *Vet. Rec.* 71,

637~743 (1959). 26) STAMATIN, N.: *Le test phagique dans le diagnostic de souche chez Bacillus anthracis et Bacillus cereus*. *Revue Méd. Vét.* 119, 1119~1132 (1968). 27) THAR, E. & NORDBERG, B.K.: *Zur Diagnostizierung von Bacillus anthracis mit Hilfe von Bakteriaphagen*. *Berl. Münch. Tierärztl. Wschr.* 81, 11~13 (1968). 28) THORNE, C.B. & BELTON, F.C.: *An agardiffusion method for titrating Bacillus anthracis immunizing antigen and its application to a study of antigen production*. *Jour. Gen. Microbiol.* 17, 505~516 (1957). 29) *Wld Hlth Org. techn. Rep. Ser. No.* 169. *Joint WHO/FAO expert Committee on zoonoses. 2nd report*, 77 (1959).

臨床ノート

ゴム輪でん絡による乳牛蹄冠部壊死の1例

後藤正博\* 阿部 勝\*\* 五十嵐幸男\*\*\*  
(昭和45年7月23日受付)

獣医臨床に従事する者にとって、時にいろいろの偶変がある。今回筆者達は乳牛の跛行診断を求められ詳細観察するとゴム輪が蹄にてん絡して病変をおこし、それによる重度の跛行であることを知った。牛の蹄病に関する報告は少なく山田が長崎県松浦地区で発生した174頭の蹄病について本誌16巻9号に発表した記事に踏創、趾間腐爛、挫趾の発生の多いことを指摘している。今回遭遇した乳牛の蹄病につき概要を報告する。

症 例

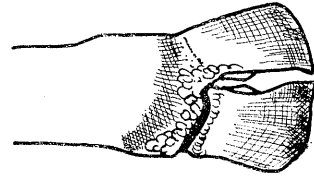
埼玉県行田市 小○明○氏所有 ホルスタイン種 雌 昭和43年8月生 昭和45年7月4日初診 この牛は45年6月17日頃より右後肢跛行する。畜主豊繁期田植最盛期のため放置しておいたところ、7月

1日頃より食欲減退し、右後蹄冠部腫大し疼痛著しく跛行も重度となり7月4日往診を求められたものである。

初診当時患畜は栄養やや不振、被毛失沢、T 39.6℃、P 98、右後蹄冠部外側腫脹して疼痛著しく、挙動不穏で3肢をもって停立し、右後肢重度の支柱跛を呈す。

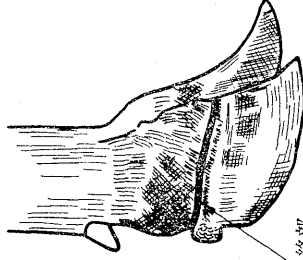
右後肢を水洗し、蹄を消毒しながら診察するに、右後蹄外側部は蹄間脂球より蹄冠にそい蹄球部にいたり、腫大し温熱あり、蹄冠部の1部壊死しその周囲はフレンジモ一ネを併発している。趾間部は悪臭ある膿を排し、蹄球、蹄冠部は腫大し2~3cmの深き裂創溝をみとめる。さらに蹄底を清拭、消毒してみると蹄球部裂創溝より蹄冠にそい深さ1~3cmの溝が形成され外側蹄を1周している黒いゴム輪(長さ15cm、幅3cm、厚さ2cm)

図1



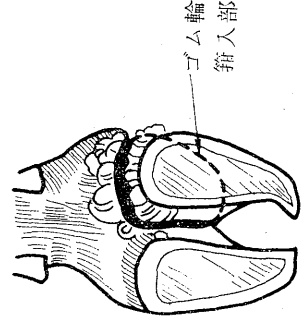
(前望)

図2



(側望)

図3



(裏面)

\* 雪印乳業都城工場 \*\* 雪印乳業一閑工場 \*\*\* 埼玉県獣医師会

がてん絡投入しているのを発見した(図1,2,3のごとし)。蹄底および内側蹄の部には何等異常を認めなかった。

そこでてん絡しているゴム輪を切除し、裂死組織の除去、排膿、消毒を行ない、出血多いので止血包帯を施し、木タール綿をもって化膿部を包み蹄包帯を施し、牛床を清潔にし治療を繰返し実施した。全身療法としてマイシリン 10 ml の筋注と止血薬 DDD の筋注を併せ実施した。約 10 日後局所症状好転し跛行も漸次軽減してきた。初診時の血液検査において L.46%, N.42%, Mo.6%, Eo.5%, B.1% であった。

### 考 察

牛の蹄病は蹄創、挫趾、趾間腐爛の発生が多い。今回遭遇したオートバートのチェーンブを輪切りにしたゴム輪がてん絡したことにより蹄冠部、蹄球、蹄腫にわたる裂死、フレングモネを併発した症例は稀有なる症例であろう。そこでこのゴム輪がいかなる機会と経過によって蹄にてん絡したかについては不詳の点もある。しかしなが

ら時あたかも梅雨期であり、パッドが泥濘化していたので、たまたまパッド内に散乱していた1片のゴム輪が放牧していた患牛の右後蹄に踏まれ、偶然にも深くかみ入ってん絡する結果となったことと推察した。よく犬猫のクリニックで肢端や頸部に子供がいたが報告される。またてん絡し、その末端が壊死することが報告される。また門倉牧場主門倉信三氏の言によると、某牧場の種雄牛が精液採取不能となり廃用剖検したところ陰茎の根部に人工腔のゴムの1部が挿入していた症例があるとのこと偶然の機会に全く予期せざる事態が生ずることを知らされた。臨床観察は稟告の聴取、現症の蒐集が特に細密でなければならぬことについては臨床家の熟知するところである。今回の症例も挙肢して蹄を詳細観察することによりゴム輪の存在を認められたものであり、蹄病を監視してその診察を監視したならばゴム輪の発見がでなかつたと思われる。蹄病の重要性を深く認識するとともに、診断の慎重性について反省する一症例と思われる。

## 家 畜

### 鶏伝染性気管支炎ウイルスの組織培養および弱毒化

#### I. ウイルスの組織培養および継代

山田進二\* 落合美和子\* 藤川英雄\* 内布洋一\* 幸田祐一\*

(昭和 45 年 4 月 24 日 受付)

#### Tissue Culture and Attenuation of Avian Infectious Bronchitis Virus

##### I. Tissue Culture and Passage of Virus

S. YAMADA, M. OCHAI, H. FUJIKAWA, Y. UCHIU and Y. KODA  
(Chemo-Sero-Therapeutic Research Institute, Inc., Kumamoto)

##### SUMMARY

Infectious bronchitis virus was propagated in chicken kidney cell culture, showing cytopathogenic effect (CPE). It also multiplied in chick-embryo cell culture, but failed to exhibit CPE. Neither virus propagation nor CPE was observed in cell cultures of first generation from the kidney of cattle, swine, goat, dog, rabbit, guinea pig, or hamster, or from the mouse embryo, or in passage cells of BHK-21 (hamster kidney origin), PK-15 or PS (swine kidney origin), or Vero (green-monkey kidney origin).

There were no differences in the appearance of CPE on culture cells, resistance to heating at 37 or 56°C, or antigenicity after virus inactivation between a strain obtained from passage in chicken kidney cells and the initial strain. The former was distinguished from the latter, since it was well propagated in chicken kidney cells, delayed in multiplying in embryonated hen's eggs, and weakly pathogenic for chickens and chick embryos.

わが国における鶏伝染性気管支炎 (IB) は 1951 年関東地方で流行した本病を川島ら<sup>1)</sup>が報告し、中村ら<sup>2)</sup>によりウイルスが分離同定されて以来、その存在が明らか\* 化学及血清療法研究所